ものぐさなきつね

小川未明

青空文庫

一

星は、毎夜さびしい大空に輝いていました。そして下界を照らしていましたけれど、だれも星を見てなぐさめてくれるものとてなかったのです。星は、それを頼りないことに思っていました。

鶏が、朝早く起きて、そのりこうそうな黒い瞳の中に、星影を映して、勇んで鳴いてくれなかったならば、星は、毎夜毎夜、音もない野原や、黒い村や、白く霧のかかった林や、ものすごい水の上を照らしていることが、もう飽き飽きして、まったくいやになってしまったにちがいありません。

けれど、若々しい鶏の喜ばしそうな鳴き声を聞くと、星は、すべての長い夜の間の物憂かったことなどを忘れてしまいます。そうして、つい鶏の愛想のいいのに引き込まれて、いっしょに日の上らない朝の間を楽しく送るのでありました。

そのうちに太陽が東の空を上ると、もはや鶏に別れを告げなければなりません。星はさも名残惜しそうにして、西の空に没してゆくのでありました。すると鶏も、もう鳴くのをやめてしまいます。

こんなふうにして、星と鶏とはたいそう仲がよかったのです。星の黙って、ぴかぴかとして

お話をするのを、鶏は頭を傾けて聞いていました。そして鶏だけには、星のものをいうことがよくわかりました。また、鶏の鳴いていろいろなことを話すのも、星にはよくわかりました。「まだ牛も馬も眠っています。私だけが起きたのです。」と、鶏は、大きな声を出して叫びます。またつぎに、

「いま、ようやく家の人たちは起きました。そして、勝手もとでガタガタ音をさせています。いま、ろうそくに火を点けて、裏口の方へ出てゆきます。きっと馬にまぐさをやるのでしょう。」と、鶏は告げていました。

二

かくして、毎朝、星は夜の間に見た不思議なことを鶏に知らせ、また鶏は、村の中のできごとを星に知らせて、たがいに春から秋になるまで、長い間、仲のいい友だちであったのです。星がしめやかな言葉つきで、

「いま、寒い風が、あちらの遠い森の中で騒いでいる。」と、鶏に告げますと、鶏は、うなだれて体じゅうを円くしてちぢむのでした。

「しかし、鶏さん、私はおまえさんを毎晩守ってあげますよ。」と、星はいったのです。

冬になって、雪が地の上に積もると、鶏は小舎の中に押し入れられてしまいました。そして

外へ出ることを許されませんでした。

哀れな鶏は、小舎の中にいて、どんなに怠屈をしたでしょう。ただじっとしていて、耳に聞くものは闇の中に狂う風と雪の音ばかりでありました。

「ああ、早く春になって、土を踏みたいもんだ。そして、あの優しい黄金色に輝く星の光を見たいものだ。春、夏、秋、なんという長い間、私たちはまた星とお話することができるだろう。楽しいことだ。」と、鶏は思いました。

星はまた、毎夜限りない、しんとした雪の広野を照らしていました。ただ見るものは白い雪ばかりでした。そしてたまたま黒い森や、山や、流れが目に入りましても、なにひとつおもしろい話をするではありません。そのほか、怠けものの獣物や、いじ悪い動物はありましたが、自分に向かってやさしく話をする、あの鶏のような友だちはなかったのです。星は鶏のことを思い出していました。そして早く春になって、鶏が小舎から出て、空にくびを伸ばして話しかける日になるのを待っていました。

三

寒い夜のことでした。山にすんでいるきつねはもう山には餌がなかったので、里へ出てなにか探してこようと野原の上を歩いてきました。きつねは村へいって鶏の小舎を襲おうと思って

いたのです。

「おお、寒い。」と、きつねはつぶやいて、空を向いて、太い息をしました。

「この寒いのに、どこへゆくのですか？」と、星はたずねました。

「山に食べるものがなかったから、里へいって鶏でも捕ってこようと思うのだ。」と、きつねはめんどうくさそうにいいました。

星は、びっくりしました。しかし、きつねは、なかなか年をとっていて狡猾でありましたから、星はちょっとだますことはできないと思いました。

「今夜あたり、狩人が寝ずに番をしているかもしれない。」と、星はささやきました。

きつねは、これを聞いてせせら笑いをしました。

「なんで狩人が、鶏の番などをしているものか。」といいました。

「おまえさんは、鶏小舎の在り場を知っているのですか。」と、星はきつねに問いました。

「なに、村の中をうろついてみればすぐわかることだ。」と、きつねは答えました。

星は、目もとに笑いをたたえて、

「そんなことをして、うろついていると、狩人に撃たれてしまいますよ。それよりここに、もうしばらく待っておいでなさい。やがて鶏が鳴く時分です。そうしたら、じきにその小舎を見つけることができます。辛棒が肝心です。」と、星は諭すようにいいました。

「そうしようか。」と、ものぐさなきつねは村の方を見て、そうすることにしました。そして

じっと耳を澄ましていました。その夜は雪こそ降らなかったが、いつにない寒い夜でありました。きつねはもう、なんとも我慢をすることができなくなりました。

「早く、鶏め鳴かないかなあ。」と思っていますうちに、間近の黒い森の方で、犬のなく声が聞こえました。きつねは、びっくりしました。

「そら、きつねさん、私のいわないことではありません。狩人の犬ですよ。」と、星はいいました。

きつねは、あわてて起とうとしましたが、尾が雪の上に凍えついてしまって、どうしても取れませんでした。やっとの思いで、痛いめをして引き離すと、きつねは空しく山の中へ駆け込んでゆきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　3」講談社
　1977（昭和52）年1月10日第1刷
　1981（昭和56）年1月6日第7刷
初出：「読売新聞」
　1922（大正11）年1月23～25日
※初出時の表題は「ものぐさな狐」です。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：江村秀之
2013年12月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ものぐさなきつね

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/